

3月に向けて

代表取締役 三田雅憲

寒さが少しずつ緩み、春の訪れを感じる今日この頃ですが、皆様はいかがお過ごしですか？

3月はいよいよ当社の創業50周年（創立35周年）の記念祝賀会の月となります。

当日は、「都ホテル八条口」の陽明殿をお借りして盛大に皆様及びご愛顧頂いているお客様や当社を長きに渡って支えて頂いてきた会社様に感謝を込めて一緒に祝いたく存じます。どうか楽しみにしておいて下さい。

私は、この創業50周年のうち約30年間、当社に席をおかせてもらい共に働かせて頂いてますが、本当にあつという間であった気がします。特に私が入社して10年の間は会社も小さかったですし、私も今以上に未熟だったために先代や社員、お客様を含め本当に迷惑のかけどうしだったと思います。私も負けず嫌いで鼻っぱしだけは強かったので人とぶつかることも多かった気がします。今振り返ってみても反省ばかりなのですが、反面、自分自身正直に一生懸命やって来たことで、たくさんの人の支えを頂けたのかもしれない。

法隆寺の宮大工、西岡棟梁の内弟子であった小川三夫さんが「棟梁」という本の中で次のように述べておられます。

「自分は1969年に西岡常一師に弟子入りしてからほぼ40年間宮大工をやってきました。鶺鴒工舎の目的は伝統の技を習得し次に繋いでいける人を育成することでした。

人から人へ技を伝えるというのは容易なことではありません。言葉で技や感覚を伝えることは不可能です。言葉や数字、データや映像に頼ってものを学んできた若者にそのことを教えるだけでも簡単ではないのです。

子供達は教わることが当たり前だと思っています。しかし、この方法に慣れた子供に技を教え感覚を身につけさせることは非常に困難です。これらの技や感覚、大工の考え方も本人が身につけるものなのです。体に記憶させる、体で考える、親方としての私の役目は西岡棟梁が私にしてくれたのと同じように鶺鴒工舎という育つための場所と仕事という現場を用意して肝心な時に一押ししてやることです。

ものを覚える、技を手に入れる、感覚を身につけるそれらは遅々として進まない道ですがある時にぐいっと階段を上がります。

つか
その階段を上がる時一つ上の何かを掴み取るのです。それが自信になるのです。弟子達には基本的に十年の修業を目標にさせていますが、修業の最後の仕上げは現場の責任を本人が負って立つことです。そのために次の若者が育つたび、先頭にいた弟子は座を譲ってきました。そのことが自分を大きくしてくれたことを皆知っているからです。」

と書かれています。ともすれば今の教育者からブーイングを受けそうな内容でもありますが、技や感覚、物事の考えは確かに教えられてできるものではなく一緒に仕事をやっているうちに感じ取ることであるように思えます。私も社員一人一人に自信を持ち責任を負って立つてくれる人々を少しでも育成していつてもらえるよう努力していきます。

又、今季最後の月となります。事故、ケガに注意して皆でやりきりましょう。